

大谷 望（東京都福生市）

タイトル「父に犒いの心を。」

父の日。それは我が一家では、僕の誕生日の二日前という呼び方をされる事でさらに影を薄くしてしまう日の事である。そもそも僕も「今度の父の日に親父に何をあげようか？」と、兄の一言が無ければ存在そのものを忘れていただろう。我が一家にとって親父の存在は絶対である。と言っても親父は独裁者ではない、今年で48になる親父は酒もタバコもやらない。母が熱だと知れば息子達より早く帰宅し、家事をこなし晩飯を作る。まるで縁の下の力持ちを形にしたような人である。そんな父親に甘えっぱなしだった息子二人も四捨五入すれば二十歳になる、自主的に何ができるかを示したくなる年頃なのだ。兄弟で何が良いか考え合っていると、兄の何気ない一言により僕は雷に打たれた。それは兄にすれば普通の発言である。

「親父にはこれと言った趣味が無いからなあ。」

違う。違うんだ、僕らの親父は趣味が無いんじゃない、僕らが親父の趣味を知らないだけだ。この気持ちは兄には言わなかった。兄弟だけあってその事を兄に言っても理解しない事ぐらいは分かる。

僕は心の中で思った、16年間息子やってて何をやってたんだ?!親父の事何も分かっていないじゃないか。僕はもうしわけない気持ちでいっぱいになった。その気持ちを押し殺して兄とプレゼントを決めた。老化防止という名目で、脳を鍛える携帯ゲームソフトに決定した。そして渡した日、そう父の日を僕は忘れない。普段パソコンを相手にして液晶を嫌う親父がゲーム機を手にとってくれた事が僕には嬉しかった。翌日になればゲームは父の頭から消えているだろうが、あの日TVのW杯に夢中にならずにゲームに熱中していた親父の姿を僕は忘れない。もし来年、同じ名前の日が来たら父をレストランに連れていこうと思う、もちろん兄弟の奢りで。唯一僕ら兄弟が親父について分かっている事は、親父はメシだけはよく食うという事だ。たとえレストランで母が親父の年を理由に食べる量を注意しても、兄弟の名において、親父には満足するまで食ってもらおうと思う。そして、親父に犒いの心をこめて一言、「僕らを養うために働いてくれて、ありがとう。」と言いたい。